

新しい協会、はじまる

新しい組織に向けて職員を先行配置

春の定期人事異動

新年度がスタートしました。4月1日には、修徳せんだんホールにおいて2022年度春の定期人事異動の発令式が行われましたが、これまでとは異なる新しい協会、組織の一体化が強く印象付けられる発令となりました。

特に、本部関係では、現行の3部門制の組織を前提とした異動の発令が行われましたが、同時に秋の本格的な組織の再編一体化へ向けて、本部職員のすべてが、新しい組織への移行を円滑に進めるために設けられた「経営企画室準備室」、「人材管理室準備室」、「事業本部準備室」の3つの準備組織のいずれかに兼職するという二重の発令が行われました（一部の職員は準備室のみの発令）。

これにより、これまで部門ごとに縦割りで配置されていた各部門の財務担当の職員は「経営企画室準備室」に、人事労務担当の職員は「人材管理室準備室」に兼職発令され、機能重視の配置となりました。また、各部門の事業担当の職員も、「事業本部準備室」に兼職配置されました。これらの準備組織は、10月にはそれぞれ正式組織となる予定ですが、すでに本部の席配置はこれらの準備組織に基づく配置となっています。

さらに、人事異動の内容でも、居宅部門の事務所長であった職員が施設長となったことをはじめとした施設長の大幅異動（本能施設長の西院施設長兼職を含む）や、昇格による世代交代も進みました。

第2期中期経営計画では、基本目標として「地域共生社会へ」、「より良いサービスを」、「新しい組織と人で」の3目標を定めていますが、特に「新しい組織と人で」が強く意識された人事となっています。今回の人事が期待通りの効果を発揮できるよう引き続き精力的に取り組めます。

「新しい風」となる新採職員の発令

新採職員入職式

4月1日には、定期人事異動の発令式に引き続き、新採職員の入職式も行われました。今回の新採職員のうち、新卒職員は14名で、高校卒も3名含まれるなどフレッシュさがあふれています。また、社会人登用も12名の合計26名が採用発令を受けました。

26名の発令内訳は、居宅4名、施設20名、児童館2名となっています。新採職員が「新しい風」となって、「新しい協会」にふさわしい清々しい息吹が吹き込まれるよう協会をあげてフォローしていきます。また、各職場の先輩の皆様には、「よき先達」としての適切な指導と温かい配慮をお願いします。



下坂 厚 撮影

記憶とつなぐ ある写真家の物語

2022年3月15日（火）から2022年3月20日（日）まで、京都市京セラ美術館において写真展が開催されました。写真家は、協会職員の下坂厚さん。若いころから写真家として活躍されていましたが、若年性認知症と診断されてから、写真撮影を再開。認知症のことを調べても悪い情報しか出てこないという状況の中で、「認知症だからこそ、できることを発信したい」と考えたそうです。今回は、写真展のご報告です。

■写真展

業界関係者だけではなく、認知症の方やそのご家族、美術館に偶然足を運ばれた方など幅広い方に観ていただきました。来場者数は、1989名！下坂さんの写真や言葉が、たくさんの方の心に響いたことは間違いありません。

認知症啓発コーナーでは、協会ご利用者で刺し子を趣味とする“ひとめひとめ”の皆さんが、芸大生とコラボした企画、「まとう刺し子」もご紹介。実際に纏っていただくコーナーも準備し、記念に下坂さんが写真を撮影する一幕も。修学旅行で立ち寄ってくれた学生の皆さん、小旅行やデートで来てくださった大学の皆さんに纏っていただきました。素敵な出会いをありがとうございました。

■トークショー

下坂さんと京都新聞編集局写真部記者の松村和彦さんとのトークショー。700万人が認知症とともに生きる時代。下坂さんの書いた記事を見て、松村さんがドキドキしながら連絡したことをきっかけに出会った二人。

下坂さんに対しては、非常に若いというのが松村さんの第一印象だったといいます。

■写真を撮るという歴史

下坂さんは、フリーカメラマンをしていた20代の頃、あまり人を撮らず、どちらかというとジオラマのような景色を好んで撮っていたということです。

今回の写真展では、フリーカメラマンであったころから若年性認知症となり現在に至るまでにどのような心の変化があったのか、分かるようにレイアウトされていました。

認知症になったばかりのころは、朝・昼・夕が分からないときもあり、この先の不安や戸惑いが多くあったそうです。自分の経験を記録に残したいと思い再開した、写真を撮ること。「写真であって、写真ではない。自分にとって記憶そのものだ」と下坂さんは語ります。「写真を撮ることは、長く親しんできたから忘れない」とも。

ただ撮影となると、構図は身に付いているが、露出は曖昧、今はなんとなく感覚で撮っているという感じだそうです。

若年性認知症と診断されて半年から1年経ったころ、ようやく病気と向き合うことができたとのことでした。



車イスで散歩していて
お地蔵さんの前を通ると
必ず手を合わせる
分からないことが増えていって
大切なことは忘れない
心はずっと無くならない

2020 10 14
のび太が
空き地の土管の上で
空を見上げて
何を思っていたのか…
こんな青空が見えてたのかなあ
記憶が失われつつある中で
アイデンティティを
失わないようにするには？
と、空を見ながら考えた午後



被写体も、徐々に人が増えてきているように感じます。写真に添えられた言葉には、下坂さんの気持ちや感情がしっかりと残されています。



「認知症になり、不便なことはもちろんあるけれど、今は認知症になって幸せです」そう言って笑顔を見せる下坂さんに、嘘偽りはない様子でした。アイヌでは、分からない言葉＝神様の言葉と言われていますが、下坂さんから見た世界は、当たり前前の生活のなかで見過ごしてしまっているものを気づかせてくれる世界なのです。疲れたときには、是非、下坂さんの写真で癒されてください。きっと、生きるということが楽しくなるはずです。



記憶とつなぐ 若年性認知症と向き合う私たちのこと



著者：下坂厚、
下坂佳子
判型：四六判
頁数：196 頁
出版：双葉社
価格：1,500 円
＋税

若年性認知症と診断された夫と、それを見守る妻。ともに病と闘い続ける夫婦の日々を綴った下坂さんの著書が発売されました

『GO!GO!KAI-GO プロジェクト』

『GO!GO!KAI-GO プロジェクト』は、福祉・介護への多様な人材参入を促進するために、厚生労働省補助事業「令和 3 年度介護のしごとと魅力発信等事業（体験型・参加型イベント）」として開始されました。様々なイベントを実施し、福祉・介護の大切さや未来の可能性を発信しています。このプロジェクトでは、協会の 2 施設が紹介されています。また、認知症とともに生きる人たちが、仲間と一緒に自分らしい暮らしを続けていくための情報サイト「なかまある」内でも紹介されています。

◆ きついつて思われていること以上の小さな感動の連続が介護の世界にあった。

～京都から考えるⅠ 紫野編～

介護の仕事は、多様な世代が多様な働き方をし、その働きやすさが人材を集める好循環とご利用者の満足度の向上を生み出しています。特別養護老人ホームやデイサービスの仕事をしている紫野の職員に 5 年後や 10 年後の介護、自分が理想とする介護、これからやってみたい介護についてインタビューがありました。



インタビューに参加したのは、特別養護老人ホームやデイサービスの仕事をしている井上貴之さん、植村真妃さん、小野山恵子さん、飯田ナミ子さん、山本早織さんの 5 名。

「自分の私生活と仕事を両立して、仕事を続けていきたい。この現場が好きなので、ご利用者と関わっているのがすごく楽しい」「介護の職場は、働く人の年齢も幅広くて、個性も豊かです。弱点を持っている人もいます。でもそれが普通の社会であって、普通のチーム。だからこそ、さまざまなご利用者に対応できる強みになる」と笑顔で語っておられます。

「介護職員は何かケアをしたいという気持ちが強い。その何かしたいはご利用者が本当にやりたいことを支援すること」と語る河本歩美施設長（現本能施設長）は、地域社会とのつながりの重要性や、認知症ケアについて、また、働き方についても様々な話をされています。ぜひ映像も交えてサイトを確認してみてください。

◆ 地域とのコミュニケーションを重視する介護施設を訪ねたら地域福祉が見えてきた。～京都から考えるⅡ 西院編～

紫野に続き、高齢者福祉施設西院の職員もインタビューを受けました。こちらは、地域社会とシームレスでつながる「sitte プロジェクト」を中心に掲載されています。

たびたび、この Associé でも紹介している、sitte プロジェクト。要介護状態であっても、何もできなくなったわけではないこと、認知症であってもできる環境を整えればやれることがたくさんあること、前向きに頑張ろうと笑顔で人生を楽しみ誰かの役に立ちたいという思いがカタチになったプロジェクトです。

この取組についてデイサービスで働く、田端重樹さん、頼尚美さん、勝見祥平さんが思いを話しておられます。



「高齢者福祉施設は、地域作りのツールになる。地域福祉を進めるためのきっかけ、拠点になると思います」と語るのは森賢一施設長（現修徳施設長）。

参加されているご利用者や地域の方の声も聴くことができます。こちらもぜひご覧ください！

【GO!GO!KAI-GO プロジェクト】



地域共生カフェ

「アクト-K」代表 / 高木俊介氏



3月23日(水)の地域共生カフェは、精神科医の高木俊介氏をお招きし、アウトリーチによる在宅精神医療に先進的に取り組んでこられた経験などのお話を伺いました。あいにくのコロナの第6波の影響も考慮して、会場参加とオンラインの併用によるハイブリッド開催となりましたが、採用内定の学生や看護師の職員等、多彩な方々の参加がありました。

高木氏は、1980年代前半、京都大学の研修医の頃、宇都宮病院事件など当時の精神医療の世界の矛盾に憤り、精神神経学会に乗り込んで演説をブツなど過激な人物だったそうです。

その後、大阪の私立病院と京大病院で精神科医として勤務したのち、病院での精神医療に限界を感じ、在宅精神医療の立ち上げのため「たかぎクリニック」を開き、「アクト」の活動をはじめられました。その前後には、「精神分裂病」の名称変更作業にも携わり、「統合失調症」の病名の提案もされています。

「アクト (ACT)」とは、ASSERTIVE COMMUNITY TREATMENTの略で、日本語では「包括型地域生活支援プログラム」と訳され、「精神医療と福祉、生活支援の訪問サービス」のことを示します。

精神科医と看護師、ケースワーカー等が連携する必要から、クリニックが中心となり、訪問看護ステーション、NPOも設立して保健、医療、福祉のチームをつくり、2004年には「ACT-K(京都)」として活動を始めて、現在では十数名のスタッフで、150名程を対象に活動をされています。このような活動は、画一的ではなく、個々の利用者 に即したサービスが必要であり、徹底したケース・カンファレンスが必須とのことでした。

お話しよりは破天荒で型破りな印象がありましたが、中身は至極真摯な話で、「地域包括ケア」を機能させるためのシステム論にも通じるものがあると感じました。また、京都福祉サービス協会の訪問介護活動を高く評価されていて、色々な事例について、一緒にケース・カンファレンスをやりましょうとの提案もありました。

精神障害のある人たちの自立のための就労支援策として企図した地ビールづくりでは、就労支援はうまくいかなかったようですが、地ビールづくりそのものは「京都一乗寺ブリュワリー」として軌道に乗っているという話も面白かったです。

飲んでみたいなあと思われる方は、QRコードから情報収集を。

京都一乗寺
ブリュワリー



- 参考書籍 『こころの医療宅配便』(文芸春秋社刊、2010年)
『ACT-Kの挑戦』(批評社刊、2008年)

職場リレーエッセイ⑥

高野事務所

【Theme】あたらしい風

今回のリレーエッセイを担当させていただくにあたり、「あたらしい風」というテーマをいただきました。高野事務所の歴史を振りかえりながら2022年度の「あたらしい風」について考えてみます。

高野事務所は、1999年に北区と左京区を管轄する事務所として開設されました。2010年に北事務所が開設されてからは、左京区単独の事務所として運営しています。ご利用者やご家族、その皆様を支える一人ひとりのヘルパーをはじめ、地域の皆様の支えのおかげで20年以上、この高野の地で運営させていただいています。

高野事務所が管轄する左京区は、市内で2番目に大きなエリアであり、お一人おひとりのご利用者宅への移動距離も長くなりがちであることや、降雪量も多いなど厳しい環境でのヘルパー業務が求められます。さらに、山間地域に訪問介護が届かないなどの地域課題がありましたが、長い歴史の中で、そうした課題に積極的に、真摯に向きあい、山間地の訪問介護を実施したり、地域の居場所となるカフェを運営するなど、協会内はもとより、京都市の皆様にも「あたらしい風」を送ってきた、と自負しています。新しいことを行う一方で、長年の歴史で、整理できなかった物品を、この春に新体制を迎えるにあたり、すべてを処分し、すっきりさせました。新体制では、フレッシュな新採職員を迎えるとともに、新たな所長を迎えます。さらに、多くのヘルパーの精神的支柱である在宅介護員が4人増えることになりました。充実した体制で、引き続き、ヘルパーが安心して業務に専念でき、ご利用者の満足度もさらに高くなる、と今からワクワクしています。



高野事務所のある左京合同福祉センターの南東角の花壇は、在宅介護員を含む事務所職員が水やりはもちろん、定期的に手入れをしています。決して大きくはありませんが、訪れる方の癒しとなっていて、水やりをしていると、「いつもありがとう」「春満開やね」と声をかけていただきます。新年度を迎え、新体制のもと、4月の優しく「あたらしい風」を受けて、揺れる花々とともに、地域の人々とつながっていきたくと思っています。

いつも Associé を読んでいただきありがとうございます。
2022年度は隔月発行(年6回、奇数月)となります。

